

佳作

祖父の湿布

栃木県白鷗大学足利中学校一年 山口博斗

三月上旬、祖父から中学校の入学祝いとして真っ白な自転車を買ってもらった。お店からカタログを取り寄せて二、三ヶ月以上悩んでやっと決めたものだった。注文して一ヶ月後、やっと僕のもとに届いた。七段変速付きでもかっこよかった。僕は生まれて初めて真新しい自転車で乗った。今まではお兄ちゃんのお古の自転車だったのでもうれしかった。そんな待ちに待った自転車だったので届くとすぐに、うれしさのあまりドライブに行った。風を切るような速さでもさすががしく感じ、早く中学生になりたいなと思いつながらペダルを踏んでいた。その自転車を「相棒」と呼ぶことにした。

三日後、小学校から帰った僕はその自転車ですぐ近くの祖父の家を訪れた。母が作った夕食を祖父に届けるためだった。祖父は祖母と二人で住んでいた

が、その時は祖母が入院していたので夕食を作れなかった。祖父の家に行くとは僕はその日学校であった出来事や、友達のことなどを祖父に聞いてもらい、祖父も僕の話をして「うん、うん」とうなずきながら聞いてくれたので、いつも三十分があつという間に経ってしまった。いつも急いで帰る、ということが日課になっていった。その日も母から、

「最近日は暗くなるのが早いから届けたら早く帰ってきなさいね。」

と言われていた。しかし、祖父との話がとても盛り上がり過ぎてしまい、一時間近く経ってしまった。気が付くと外は真っ暗になっていたので、急いで自転車で乗り家へと向かった。目の前の信号がちょうど青だったので、急いで横断歩道を渡った。その瞬間、僕の左側から大きく動いているものが、ぼくの自転車の後ろ側と左腕に触れた。僕は地面に叩きつけられるように自転車ごと倒れた。

一瞬、何が起きたのかはわからなかった。交通事故を経験したのは、初めてだった。交通事故は、毎日様々な場所で起きています。死亡者や重傷者が出る事故も少なくはない。僕は、運が良く膝の打撲程度で済んだが、相棒である大切な自転車のハンドルや

かごが曲がってしまい、とてもこげるような状態ではなかった。なんだか、とても悔しかった。祖父の家の前での事故であったため、僕は自転車を押しながら祖父の家に戻った。祖父は、青い顔をして戻ってきた僕を見てびっくりしたが、説明すると

「大丈夫か？」

と、優しく声をかけてくれた。そんな祖父の優しい言葉と、事故にあった恐怖と、買って三日目の自転車を壊してしまったことへの悔しさで、それまでこらえていた涙が、溢れ出てきた。とても悲しかった。そんな様子を見て祖父は

「もう泣くなよ。」

と言いながらひんやり冷えていた湿布を僕の青アザに貼ってくれた。季節は冬だったが、なぜかその湿布が温かく感じた。祖父の温かい言葉と湿布が僕の冷たくなった心の傷を治してくれた。祖父の湿布は、僕にとって最強の薬であった。